

第二章 とちぎの可能性と課題

栃木県には、優れた自然や田園風景、広大な土地、産業の集積、誠実で勤勉と言われる県民性など、将来の可能性を秘めた資源が多数ある。一方では、国際競争の影響を受けやすい産業構造や新たな時代の人づくりなど、将来に対する課題も挙げられる。

私たちは、とちぎの可能性と課題を的確に把握し、可能性を最大限に活かしながら課題の解消を図って、よりよい郷土づくりを目指していくことが必要である。

■ 歴史的経緯に見る可能性と課題

本県は、江戸時代には江戸へ食料や織物などを供給し、明治以降も、食料生産基地として、また殖産興業に基づく近代的な織物生産や、足尾銅山開発などにより我が国の発展を担ってきた。また、戦後は積極的な工業団地整備と工場誘致によって、我が国の高度成長と同時に急速に発展してきた。特に本県には、輸送機械や家電など組立加工型の工場が集積して、地元企業がその下請けとして成長し、現在の経済構造を形作っている。

近年では、「宇都宮テクノポリス計画」をはじめとして先端産業や研究所、高等教育機関の立地などが進み、研究開発型の新たな産業構造の構築が進んできたが、現在では、低成長経済への転換、国際競争の激化の波、経済発展に伴う生活や意識の変化など、まさしく我が国が直面している産業経済や地域社会の課題に典型的に直面することとなっている。

本県の歴史は、広大な土地資源や豊かな人的資源を背景に、江戸・東京という大都市圏を消費地として着実な生産活動を展開しながら、全国的な工業化・高度成長の流れをうまく捉えて発展してきた歴史である。

今、地方分権の時代を迎え、本県は、東京との結びつきにとどまらず、全国や世界と直接に交流しながら新たな役割を果たしていくことが求められている。これからは、本県の個性や特性を十分に発揮できる、自立した地域づくりに主体的に取り組んでいくことが必要である。

■ 首都圏に近接する恵まれた立地条件

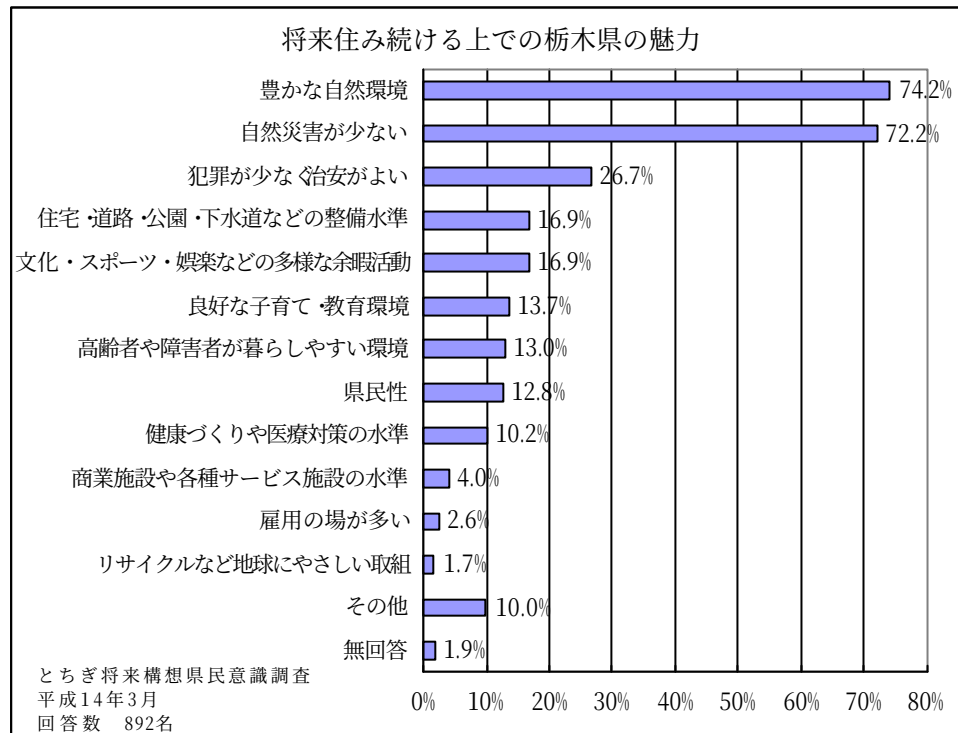
本県は、首都東京から 60 ～ 160 km に位置し、首都圏の一翼を担っている。また東北縦貫自動車道、東北新幹線などが県を南北に貫き、東北・北海道に向かう北東国土軸上に位置している。

これまでは、南北方向の軸に比べ東西方向の軸の弱さや、内陸県として世界との直接の結びつきの弱さなどが指摘されてきた。今後、東西方向に走る北関東自動車道の開通により東西方向の新たな地域連携軸が形成されることになり、北関東・東北・上越地方など広域的な交流の中心的な役割を担うとともに、常陸那珂港などを介して世界との結びつきも可能になっていく。

また、本県の立地条件を生かす上では、大消費地東京を生産活動のターゲットとしていくことはもとより、東京の持つ世界有数の高度機能や、筑波研究学園都市や成田空港が有する研究機能や国際機能の集積を活用し、地域の発展につなげていくことも必要である。

一方、IT革命により地域や国の垣根が取り払われつつあることや、製品の高付加価値化、軽薄短小化が進んだことなどにより、首都圏への近接性や交通の利便性などの立地条件は、以前ほど絶対的な条件ではなくなりつつある。

このため、今後は、企業の活動環境の整備やうるおいある生活環境の整備などを進めることにより、本県の持つ総合的な魅力になお一層の磨きをかけ、これからの県民生活の糧を戦略性を持って考えていくことが必要になっている。



■ 豊かで広大な県土

本県は関東地方で最大の面積を有し、比較的平坦な地形とも相まって、生活や産業活動の場としての土地資源に恵まれており、我が国有数の内陸型工業生産基地として、また首都圏の食料生産基地として大きな役割を果たしながら発展してきた。

これからは、人口減少時代の到来、経済構造・産業構造や企業のあり方の変化、土地神話の崩壊などにより、土地の所有・利用に対する考え方も変化していくことが予想される。このため、今後、無秩序な土地利用を極力排し、スプロール化に歯止めをかけ、環境や自然と共生した効率的な土地利用を進めていくことが必要である。

また、この豊かで広大な県土に個性溢れる地域が息づいており、それぞれの個性を重視した地域経営を推進し、さらに魅力ある地域づくりを進めていくことが重要になる。

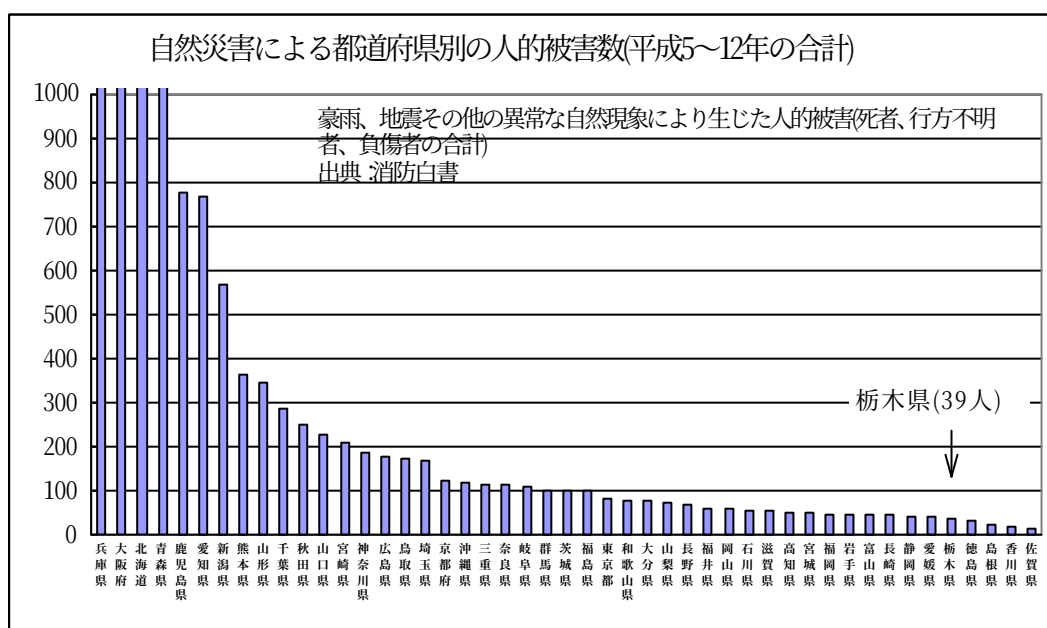
■ 安全な県土、生活の安全

本県は地震、風水害、土砂災害などの自然災害が少なく、また首都東京と適度な距離にあることから、首都機能をはじめ、東京のバックアップ機能など、様々な機能の立地可能性を考えることができる。しかしながら、100%の安全は存在しないことを念頭に、常に

安全意識の更新や安全性の向上に努めていくことが必要である。

一方、生活の安全の面では、近年、人間関係の希薄化や他者を思いやる心の喪失などが青少年の心の荒廃、犯罪の増加や凶悪化などを招いており、基本的な生活の安全を確保していくことが大きな課題となっている。また、社会経済活動の高度化に伴って、人的ミスや組織防衛意識が重大な社会的障害や災害の拡大を招く場合もあり、様々な生活の安全を守るための対策が必要になっている。

また、本県は一人当たり自動車保有台数が全国で5番目に高く、常に交通事故多発県に名を連ねている。モータリゼーションの進展は県民の生活の利便性を高めていくが、一方で、県民の安全の確保や地球温暖化対策の上では重大な問題を投げかけており、交通安全対策の充実はもとより、クルマ中心のまちづくりから人間中心の環境にやさしいまちづくりへの転換が求められている。



■ 優れた自然、豊かな環境

県内には、世界に誇る日光国立公園のほか、豊かな地域特性を持つ8つの県立自然公園があり、首都近郊では大変貴重な美しい自然が残され、その中にはわが国を代表する観光保養地が育まれている。また、豊かな里山や田園が四季折々に織りなす風景は、私たち日本人の原風景ともいえる景観である。

今後、自然志向がさらに強まっていく中で、優れた自然とのふれあいを楽しみながら、将来に向けて環境を保全していくことは私たちの責務である。

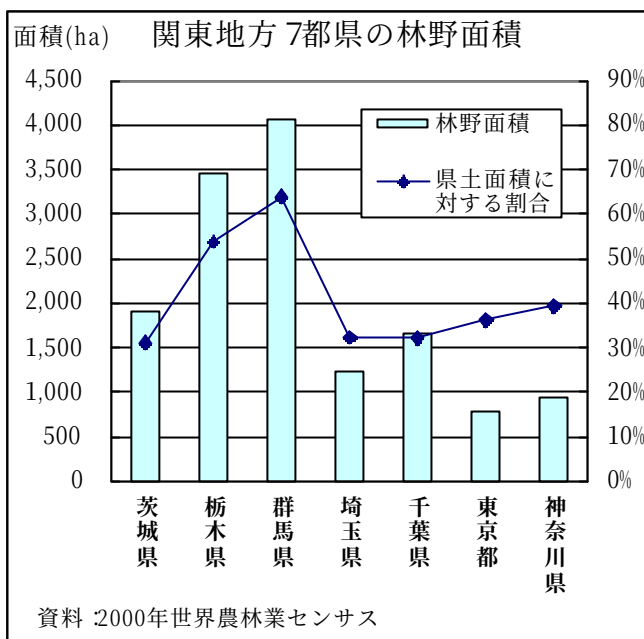
また、本県は、県土の55%が森林となっており、地球環境の保全や県土の安全確保の上で大きな役割を果たしているが、林業の担い手不足などによりその維持が困難になることが予想され、多様な森林を今後とも適正に維持し育てていくための新たな対策が必要となっている。

さらに、このような環境を守っていくためには、私たちの生活から必然的に出る廃棄物の減量や適正処理、温室効果ガスの削減など、持続可能な将来に向けて循環型社会をつく

るため、すべての人が努力していくことが求められている。

特に、本県はエネルギーの大部分を他県に依存しており、また廃棄物の最終処分の相当量を県外に頼っている状況にあることから、環境負荷低減に向けた取り組みが強く求められる。

また、水資源に関しては、上流域に位置していることから、下流域と連携した水資源確保や災害対応が重要となる。



■ 受け継がれてきた優れた文化

本県は、古くは東山道、江戸時代には奥州街道、日光街道などの主要街道が南北に通り、人や物が行き交う場所であった。また、下野薬師寺、足利学校、日光の二社一寺などに見られるように、文化や宗教の中心地としての一面も有していた。

また、織物や和紙、工芸品など、暮らしに根付いた伝統的な技も受け継がれている。このような歴史と伝統を引き継ぐ優れた文化や技は、私たちの暮らしや心を豊かにしてくれる県民共通の財産であり、新たな文化創造の源である。

本県は、江戸時代、譜代大名や旗本などの所領に細かく分割統治されたため、大きな藩が支配した地域のように独自の文化や生活様式を生み出すには至らなかった。また、近世以降は江戸・東京の影響圏にあったことなどもあって、県民の間に文化を深化・発展させたり、自ら文化を創造し、発信していくという気風が育ちにくかった。

今後、成熟した知恵の時代を迎える中では、伝統文化をしっかりと守り育てることや、新しい文化を創造していくことによって、県民生活に文化的な豊かさをもたらしることが必要である。また、こうした取組によって、サービス産業やモノづくり技術と文化的価値が融合した新たな産業の展開など様々な波及効果が期待される。

■ 豊かな食料基地

本県は、広大な土地と豊富な水資源や気象条件などに恵まれ、加えて東京という大消費地に近いことから、全国有数の農業県として発展し、県内はもとより首都圏の食料供給基地として大きく貢献している。その結果、平成 12 年の農業粗生産額は全国第 11 位となっており、全国一の生産量を誇る「いちご」をはじめとして、全国で上位を占める農産物が数多くある。

一方、全国的な傾向と同様に、本県においても農業の担い手が高齢化してきており、農業後継者の不足が懸念されている。また、経済のグローバル化に伴って、海外からの輸入

農産物との競争が今後ますます激化していくことが予想される。

このため、農業や農村の持つ多面的機能を維持しながら、消費者が求める安全で安心な食料を安定的に供給するため、本県の持つ有利な条件を生かした、生産性と収益性の高い生産体制の確立が求められている。

また従来は、画一的な流通施策の下で、県民が、地域で作られた安全で新鮮な食材を直接手にする機会も多くはなかったが、農産物直売所にみられるように、地産地消の促進により地域の消費者と生産者の距離が近くなってきており、地域の食材を活かした食文化を守り育てようとする意識も徐々に高まっている。

こうした流れは、消費者に農業の大切さや自然の恵みに対する感謝の気持ちを芽生えさせ、都市と農村の交流促進につながっていくことが期待される。

一方、農業は自然循環機能を生かした産業と言われているが、循環型社会の構築が大きな課題となっている中で、農業分野においても環境と調和した農業生産の推進が求められている。

品目別農業粗生産額(億円)

品目	県内 生産額	全国 シェア(%)	順位
米	948	4.1	8
生乳	288	4.2	2
肉用牛	192	4.1	6
いちご	267	14.3	1
トマト	72	3.8	9
なし	60	5.4	5
にら	55	21.7	1
二条大麦	51	25.9	2
こんにゃくいも	7	6.5	2
そば	6	8.6	4

資料：平成12年 生産農業所得統計

■ 新たな経済基盤の創造

本県は、近世から続くモノづくりの伝統の上に、昭和 30 年代後半から積極的な工業化政策を進めた結果、我が国の高度経済成長を支える工業生産基地として国内有数の工業県に成長し、平成 11 年の製造品出荷額等は全国第 12 位となっている。

内陸に位置する本県には、豊富な土地資源と勤勉で優秀な労働力を背景に、輸送機械や家電など加工組立型の産業を中心に多くの工場が立地してきたが、昭和 50 年頃からは、先端的な技術や研究開発機能を有する企業の進出も目立っている。

また、全国的に見てもレベルの高い工業や農業に加えて、全国中位に位置づけられる商業・観光サービス業などの第 3 次産業も時代の変化に対応しながら着実な成長を遂げてきており、その結果、平成 10 年度の一人当たりの県民所得が全国第 8 位にランクされるなど、全国有数の所得水準を誇る豊かな県となっている。

しかし、産業構造の変化や経済のグローバル化に伴い、労働集約型工場の海外移転による製造業の空洞化や、規制に守られてきた内需関連産業の淘汰が進んでおり、今後ともこの

都道府県別一人当たり県民所得

順位		一人当たり 県民所得 (千円)
1	東京都	4,189
2	愛知県	3,550
3	大阪府	3,312
4	埼玉県	3,274
5	神奈川県	3,263
6	滋賀県	3,226
7	千葉県	3,213
8	栃木県	3,172
9	静岡県	3,100
10	群馬県	3,057

資料：県民経済計算年報

平成14年版

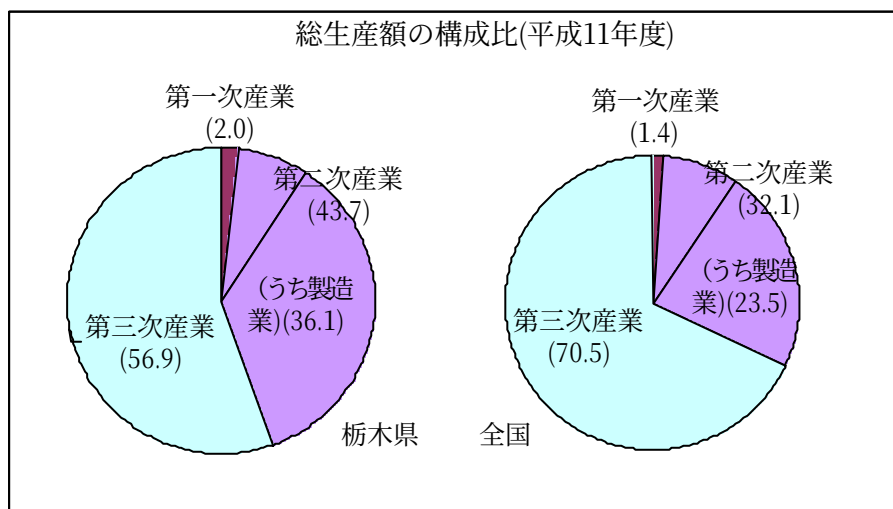
傾向は続くものと考えられる。

アジアをはじめ世界との地域間競争に勝ち残っていける能力や特色のある企業が育つことが、地域の経済社会の発展にとって重要になっており、付加価値の高い先端産業、研究開発などの知識集約型産業への転換が求められている。また、製造業においては、ロボット、バイオテクノロジーなどの未来型産業などが有望な成長分野とされており、今後これらの分野を中心に、産業の高度化を図っていくことが重要である。

また、中小企業においては、各企業の特性を生かした交流などにより知恵のネットワークを拡げ、首都圏への近接性を活かしたマーケットニーズへの即応や、こだわりを持ったモノづくりなど、個々の企業の自立・高度化・差別化を図り、「とちぎ」発の世界企業を育てていくことが重要である。

同時に、これからの地域の労働力の受け皿確保の面からも、県民の潜在需要を積極的に掘り起こし、生活のアウトソース支援産業や、福祉、医療、教育などの対人サービス産業、環境関連産業などの生活密着型産業が安定した地域経済の基盤を形成する、内循環型の地域社会を確立することが必要になっている。

また、ボランティアやNPO、コミュニティビジネスなどの新たなセクターは、画一的な行政と市場原理の企業の間を補完するシステムとして、また同時に人々の社会貢献意欲や生きがい、ライフステージに合わせた多様な労働時間、収入など様々な条件を満たせる雇用の場として、地域経済の基盤形成にも貢献するシステムとして期待される。



資料 :県民経済計算

■ 住む人にも訪れる人にも魅力あるとちぎ

本県は可住地面積当たりの人口密度が全国的に見て低く、人口千人当たりの都市公園の面積の割合も高い。また、自然災害が少なく、ゆとりある立地の中で安心して暮らせる環境にある。しかし一方では、平坦な地形の影響で市街地の無秩序な拡大や、田園環境の破壊、居住環境が進んでいる地域も見られるため、今後、土地利用を整序し、豊かな自然や田園空間を保全していくことが課題となっている。

優れた自然環境や田園風景の中に、都市的な生活機能や産業基盤の集積をバランスよくあわせ持ち、都市と農村、自然が一体的に共存する本県は、全国に誇れる、暮らしやすく

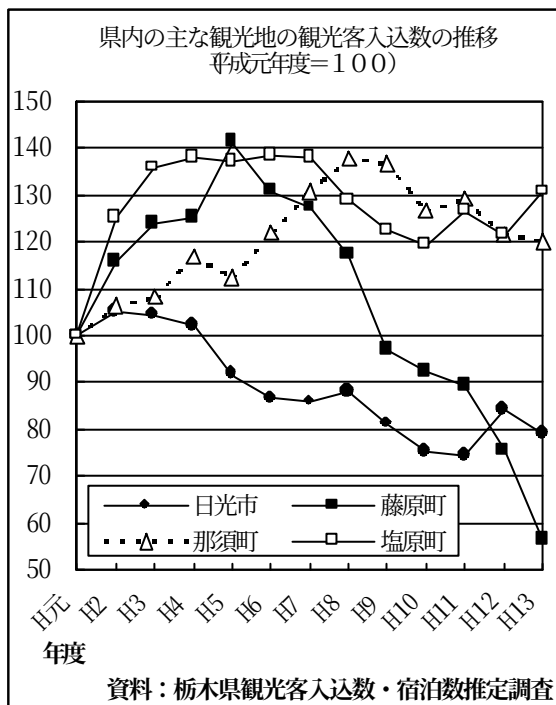
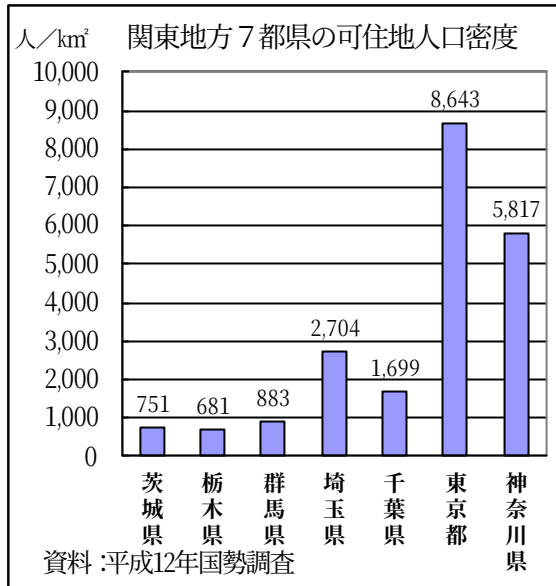
活力ある地域として大きく発展する可能性を秘めている。

また本県は、日光や那須、鬼怒川、塩原などをはじめとして、温泉地や景勝地に恵まれ、東京からの近接性を生かした首都圏の奥座敷として、全国でも有数の観光県となっている。しかし、近年では、自然や観光施設など、観光対象すべてに本格志向が高まり、観光地全体の演出や雰囲気づくりが重要となっている。

今後、労働時間の短縮や労働形態の変化、家族を大切に考える方や個人志向などにより、長期滞在型観光の増加、平日やシーズンオフにおける観光客の増加、団体旅行から個人旅行へのシフトなどがさらに進むことが予想され、観光地もこれに対応していくことが必要となっている。

また、滞日・訪日外国人の増加に対応して、本県では、世界遺産である日光の特徴を活かすなどにより、アジアからの観光客誘致への積極的な対応が期待される。

一方、県民生活の面から見ると、今後増加する余暇時間を有意義に過ごせることは、地域の魅力として極めて重要な要素になる。これからは、日常生活を豊かにする手軽な観光資源として、本県の誇る身近な自然や田園的生活などを楽しめる農村観光や、ショッピング&グルメ、歴史文化資源などを中心とする都市型観光などが重要になってくる。



■ 重要性を増す健康づくり

近年、高齢化などに伴って、全国的に健康への関心が高まっている。

特に本県では、全国的に見て脳卒中死亡率や心疾患死亡率が高く平均寿命が短いなど、生活習慣病対策が急務となっている。また、病院受診率や有訴率は全国と比べて低い。

本県において大きな課題となっていた食塩摂取量については、減塩運動による取組や食習慣の変化などによりほぼ全国並みまで改善してきたものの、脂肪摂取量や肥満、喫煙など生活習慣病の原因となる他の要素についてはまだ問題を残している。特に、本県では、

運動習慣のある者の率が低く、また全国的に見てクルマ社会化が進んでいるためごく近所に買い物に行くにもクルマを使うなど、歩く習慣が薄れている。今後、このような生活習慣をできるだけ改め、日常の暮らしの中で健康づくりを行っていくことが重要である。

また最近、子ども達の間にも生活習慣病が増加しており、加えて、子ども

もたちの心のケアも重要な課題となっている。最近の子どもたちの生活は様々な原因から不規則になっており、スポーツ離れが進んでいることなどとあわせて、子どものうちからの健康づくりも重要な課題である。

全国的な健康志向の高まりの中で、本県においても健康づくりへの志向は徐々に高まってきたものの、県民自らの健康管理の動機づけについて、さらに抜本的な対策や意識改革が必要となっている。また、健康づくり対策として、日常的な運動やスポーツの普及促進や、食習慣などの改善などに積極的に取り組み、健康で長生きできるとちぎを実現することが必要である。

一方で、医療システムについては、かかりつけ医によるプライマリ・ケアから高度・先端医療までの地域医療体制のシステム整備などが必要となっており、本県においても、全国トップレベルの医療システムを目指して努力していくことが必要である。

また、高齢化の進展などにもともなって、医療保険や総医療費などについても様々な課題が生じており、今後見直しが必要になると考えられる。

■ 少子高齢化の進展と人口減少時代

国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、本県の人口は 2010 年の 202 万 2 千人をピークに減少に転じ、2025 年には 193 万 4 千人になると見込まれている。

本県の人口は、昭和 30 年代以降の活発な工場立地や、東京通勤圏の拡大などにより一貫して社会増を続けてきたが、人口の社会増は経済動向に左右される傾向があることから、安定成長時代においては大幅な増加は期待しにくい状況にある。

また、人口の年齢別構成比を見ると、年少人口と生産年齢人口の割合は一貫して減少する一方で、老年人口比率が大きく増加し、2010 年には 21.4 %、更に 2030 年には 29.9 % と、10 人のうち 3 人が 65 歳以上となることが予測されている。

人口減少局面においては、社会の活力維持が大きな課題となり、労働者の減少により一定の成長を確保することが難しくなるのではないかとされている。このため、社会の活

三大死因別の年齢調整死亡率の推移(人口10万人当たり)

区 分			昭55	順位	昭60	順位	平2	順位	平7	順位	平12	順位
全死因	栃木県	男	992.3	45	855.8	40	789.2	43	741.2	37	661.1	39
		女	626.3	47	522.4	45	466.9	46	389.4	36	343.2	45
	全国	男	923.5		812.9		747.9		719.6		634.2	
		女	579.8		482.9		423.0		384.7		323.9	
悪性 新生物	栃木県	男	204.8	23	201.4	18	207.8	22	218.6	24	211.4	26
		女	111.0	10	110.1	24	106.6	30	102.6	18	103.0	30
	全国	男	210.9		214.8		215.6		226.1		214.0	
		女	118.8		113.1		107.7		108.3		103.5	
心疾患	栃木県	男	156.8	19	149.8	33	143.5	34	105.2	40	95.9	42
		女	105.1	27	96.1	29	91.8	36	60.0	31	54.5	45
	全国	男	158.0		146.9		139.1		99.7		85.8	
		女	103.9		94.6		88.5		58.4		48.5	
脳血管 疾患	栃木県	男	270.5	47	178.5	47	125.9	47	122.6	47	90.0	44
		女	189.7	47	133.1	47	94.8	47	78.2	46	56.1	46
	全国	男	202.0		134.0		97.9		99.3		74.2	
		女	140.9		95.3		68.6		64.0		45.7	

資料：人口動態統計

力を維持し続けるためには、女性や高齢者の社会進出を促進していくことが重要なテーマとなる。

全国で見ると、2000 年と比較した場合、2020 年時点における生産年齢人口の減少は約 1,200 万人と予測されており、当面は女性や高齢者の社会進出促進や労働生産性の向上などによりカバーしていけるものと考えられるが、2050 年時点では 3,200 万人以上、約 38 %もの減少が見込まれており、いずれ労働力不足が顕在化してくるものと考えられる。

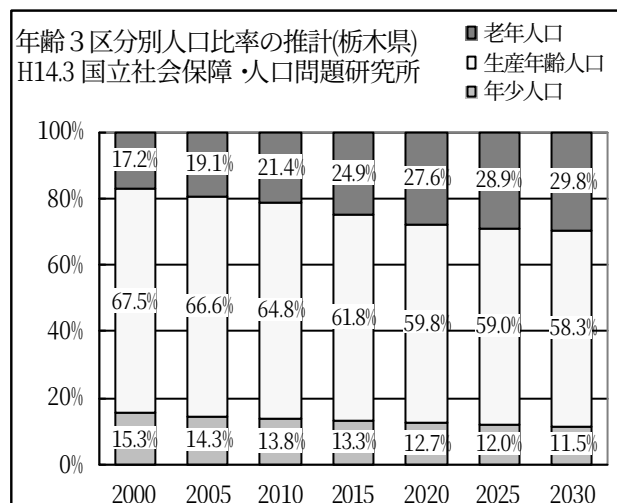
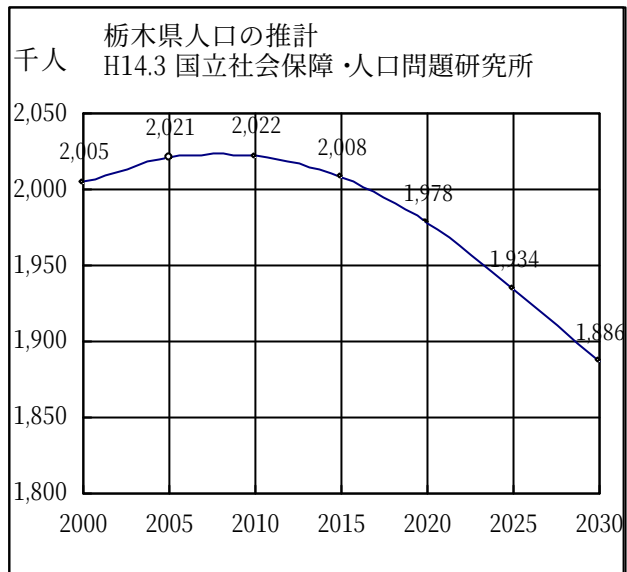
また、労働力人口の減少と高齢化率の高まりにより、年金や医療費等の負担が大きな課題となるが、高齢者自身の係わり方も含め社会全体で高齢者を支えていく持続可能なシステムや仕組みの構築が必要である。

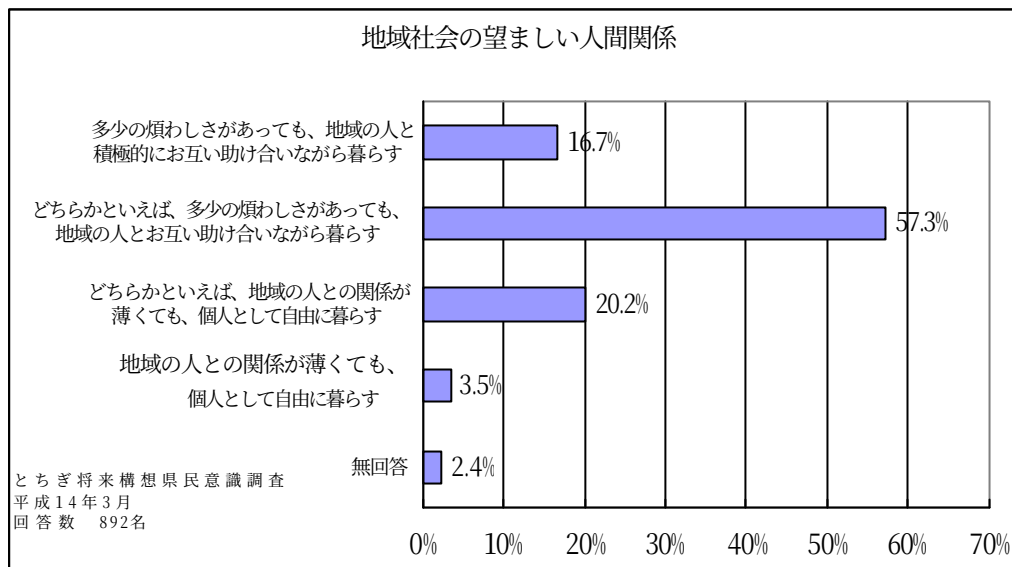
様々な要因により、子どもを産まない傾向が強くなってきているが、多くの人々の心の豊かさの源泉でもある子どもや若者達の減少は、直接的な人的資源の減少に止まらず、社会そのものの活力を大きく減退させることにつながりかねない。

子どもを産み、育てることが、人生のハンデになるような社会であってはならず、子育てをしながら働きやすい社会システムづくりなど子育て環境や、両親ばかりでなく地域の人々みんなで子ども達を育てていくという気運を創り、また生まれくる子ども達には明るい未来が開けていると感じさせる社会を創り上げていかなければならない。

本県では、全国に比べて多世代同居の居住形態が多く、高齢者のみの世帯が少ないこと、平成 10 年度に実施した県民へのアンケート調査結果によると「周囲の人々との温かい交流がある」が上位に挙げられていること、また、県民の 8 割が社会貢献活動全般に関心があることなどから、長い間培われてきた誠実で勤勉な県民性や、人と人とのふれあいや協力を大切にする心が脈々と息づいているものと考えられる。

もたれかかりでもなく排他的利己主義でもない、新しい 21 世紀の人と人の関わり方や、人を尊敬し、信頼し、愛おしむ心を一人ひとりの県民や個々の地域から再構築し次の世代に伝えることによって、安心で心温まる地域社会づくりを進めていくことが、少子高齢の時代を切り拓く最大の鍵になってくる。





■多様化する教育への要求

戦後の我が国の教育は、機会均等の理念の下に、その普及・拡大と教育水準の向上が図られ、経済・社会の発展に大きく寄与してきた。しかしながら、世界が規格大量生産型の近代工業社会を脱し、「知恵の時代」という新しい価値観に向かい動き始めた中で、創造性や独創性に富んだ新しい時代にふさわしい人づくりが求められている。

また一方では、子どもたちの問題行動や不登校などが深刻になっており、青少年の社会性や規範意識が希薄化し、働くことや生きることを見いだせない若者も増加しているなど、子どもや青少年の「心」のあり方も大きな問題となっている。

さらに、いわゆる「読み書きそろばん」的な基礎的・基本的学力を身につけられない子どもが増加しているとも言われており、勉強嫌いの子どもの増加や学校以外で勉強しない学生・生徒の増加と相まって、「ゆとり教育」と学力の維持向上をどのように両立させていくかが大きな課題となっている。

教育の目的の実現のためには、家庭・学校・地域社会等が互いに連携・協力して真剣に取り組むことが重要である。特に、社会規範意識や自制心の希薄な青少年が親になることで家庭の教育力が今後さらに低下したり、地域コミュニティの結びつきの弱まりなどによって問題がますます深刻化することも予想される中で、基本的な生活習慣や倫理観、自制心、自立心など人間として生きていくための基礎的な資質や能力を育成する場として、家庭や地域社会が果たす役割は今後ますます重要になる。

また現在、地球環境問題などライフスタイルにかかわる社会共通の課題や、高齢化に向けた福祉社会づくり、男女共同参画社会づくりなど人間関係のあり方に立ち戻ることが必要な課題が山積している。これらの課題に対しても、子ども時代から、他者を思いやる心や命の尊厳を大切にする心、公共心・公德心、人間同士のコミュニケーション能力などを養っていくことが、その解決の原点であるとも考えられる。

さらに、幼少期の「群れて」「遊ぶ」経験や子ども達自身による社会の形成も子ども達

の心身両面にわたる人格形成に重要な役割を果たすものであると言われており、こうした子ども達自身の活動を拡大させる取組も重要である。

一方、我が国が新しい時代に果敢に挑戦し、国際社会の中で確固たる地位を維持し続けるためには、創造性や独創性に富んだ新しい時代にふさわしい人材や、我が国や外国の文化・伝統を尊重し、日本人としての誇りとアイデンティティを持って世界に羽ばたき、高い使命感に基いて地球社会に貢献していく人を育てていくことが求められている。

しかし、入学すれば卒業できてしまう大学の現状と、いまだに根強い学歴偏重の風潮のもとで、学ぶことに対する動機付けが「いい学校に入りいい会社に就職する」という単線的、打算的なものとなってしまう、本来「学び」の入り口であるべき入学試験自体が学ぶことの目的となってしまうことが、我が国の教育を大きくゆがめているとも言われている。

さらに、ペーパーテストに偏重した画一的な入学試験が、独創性や多彩な才能、問題解決能力などの伸長を難しくしているとも言われており、生きる喜びや人生の目的に沿った多様な幸福追求のモデルを子ども達に示し、厳しさや苦しさの向こうにある喜びや楽しさを教え、受験といった直接的利益のための知識の集積ではない、「知」そのものへの憧れを子ども達に芽生えさせていくことが大切である。

また、後期中等教育、そして高等教育は、社会人として働くことの意義や目的を学び、社会人としての課題解決のための基礎的能力を養成するための場であり、更に独創性ある才能を開花させていくための場である。

雇用環境は、新卒を中心とした終身雇用・年功序列制から能力主義・成果主義重視へと転換を始めており、その中で、即戦力や専門的能力が一層求められるようになっている。

今後、社会や企業が求める人材を養成するために、後期中等教育のあり方の見直しや職業人養成のための大学教育の抜本的な改革、大学院大学といった高度で実践的な教育機関の整備、さらには、あらゆる世代の人達が常に新しい知恵や技能を求めて教育を受けられる社会システムづくりなどが求められている。

一方で、人材育成と並んで高等教育機関のもう一つの重要な役割である研究、すなわち「知」の創造については、社会への還元性を明確化しながら、世界レベルの「知」の集積を目指して、大胆に取り組んでいく必要がある。

日本がジャパン・アズ・ナンバーワンといわれ繁栄に酔っていた 1983 年、アメリカのレーガン政権は「危機に立つ国家」と題した教育白書を国民に示し、教育改革に全力で取り組んでいった。最近でも、イギリスのブレア政権をはじめ先進諸国の政権は教育を最大の課題と位置づけ、国を挙げて極めて大胆な取組を展開している。

大きな時代の転換期を切り拓いていくときは、国を挙げて教育、人づくりに取り組んでいくことが求められており、時代を変えていくための王道は正に教育、人づくりであるといえる。

教育こそは、全ての人々が、過去、現在、未来、いずれかの時期に必ず直接的な関わりを持っており、全ての人々が、何らかの形で、直接的な当事者である課題である。

全ての県民が徹底的に議論を尽くしていくことにより、21世紀におけるとちぎの、そして日本の教育の新たな枠組みを作り出していくことができる。

■ 21世紀を拓く原動力

人づくりは国家百年の大計と言われている。

21世紀は、情報革命が進み、個人が旧来の中央集権や覇権主義の呪縛から解き放たれ、これまで組織の歯車の一部に過ぎなかった個人の力が、そして個人の「知恵」のネットワークが、時代や地域、国そして地球をつかさどる原動力となる、恐らく人類史上初の世紀になると思われる。

そしてこうしたネットワーク型社会を支えていくものは、個人の能力や誇り、理性、倫理観などである。

全ての人の潜在能力を最大限に発揮すること、そして強い理性と高い倫理観を持って、たとえ失敗しても絶望することなく一所懸命頑張る若者達を育て、全ての県民が、徹底的に議論を積み重ね、強い信念を持って「未来への投資」を推し進めていけば、とちぎ生まれの小さなジェントルパーソンや小さな地球市民達が大きく育ち、「知価」日本一、「県民所徳」日本一の21世紀の人材大県となることが期待される。

第三章 とちぎの将来像

今、私たちは、人類史を画する歴史の転換点に立っている。そして我が国は、明治以来続いたキャッチアップによる成長の時代に別れを告げ、世界のリーダーの一員として、真に成熟した国へと生まれ変わろうとしている。

私たちは新たな日本を創造するフロンランナーの気概を持って、このすばらしい郷土“とちぎ”の魅力と可能性を活かし、希望と誇りの持てる自立した地域として持続的に発展させていく。

このためには、私たち一人ひとりが、個性と能力を十分に発揮し、互いに連携し支え合いながら、夢と創造にチャレンジし、歴史の転換点を越えた新たな地平を切り拓いていくことが必要である。

1 とちぎの将来像

これまで見てきたように、私たちの郷土栃木県は、恵まれた立地条件や豊かな自然、多彩な文化、そして誠実で勤勉な県民性など、優れた特性や更なる飛躍の可能性を秘めている。

私たちは、時代の変化に的確に対応し、本県の持つ可能性を最大限に活かしながら、私たちの“とちぎ”を、人々が豊かで活力に満ちた生活を営み、自然や街並み、そして人々の心が美しさやさしさにあふれる郷土としていく。

私たちが目指す郷土は、“とちぎ”の担い手たちが凛とした気概を持ち、“とちぎ”をめぐる全てに生きる喜びがわき上がり、都市や農村、山河や森林など、命あるもの全ての活動の舞台としての“とちぎ”に四季がいぶき、みずみずしい感性が宿る、そして、広く世界に開かれ、未来の子供たちにさらなる可能性を約束する、そんなみんなが愛し、創り出す郷土“とちぎ”。

私たちは、このような郷土の将来像を、

「活力と美しさに満ちた郷土“とちぎ”」

として、このすばらしい栃木県を次世代に確実に引き継いでいく。

2 将来像実現のための基本理念

(1) “とちぎ”づくりの基本的方向

近代工業社会においては、大きな組織が効率性を求めて行動することが必要とされ、我が国は、横並び型の護送船団方式と結果平等の追求により高度成長を実現してきた。しかし、このシステムにおいて、現在では無責任ともたれ合い、そして活力の低下といった制度疲労が目立ってきている。加えて、経済的な豊かさを追い求める過程で、人間関係が希薄化し、私たち日本人から、他者を思いやったり、多様な価値観を認め協力し合うといった「心」が失われつつあると懸念されている。

私たちがこれから向かおうとしている「知恵の社会」は、多彩な「個」が、ある時は協力しつつ、ある時は切磋琢磨しながら、様々なチャレンジによって新たな道を切り拓いていく社会である。

しかし一方で、機会均等の過度な競争がもたらす優勝劣敗社会は、身勝手やエゴが暴走する不毛で危険な社会を作りかねないということも危惧されている。同時に、さらに進展していく高齢社会は、地域の中で互いに助け合い、喜びを分かちあえる社会でなければならない。

さらに、私たちを育てている環境の容量の限界が明らかになってきた今、私たちの暮らしそのものを見つめ直し、環境と共生できるものとしていくことが求められている。

そこで私たちは、まず、私たち自身や企業、さらには地域が、それぞれの持つ個性や能力を最大限に発揮できるよう、自らを磨き、自立していかなければならない。

また、社会を構成する個人や企業、さらには地域全体が、豊かな心と公共心を持って、それぞれ協力・補完しあいながら、人と人、人と社会、人と自然との間に相互の信頼や共生、共助の関係を積み重ね、弱きを助け、挑戦者に勇気を与える「ヒューマンセーフティネット」の輪を拡げていくことが必要である。

そして、自立した主体と「ヒューマンセーフティネット」の基盤の上に立ち、全国に、そして世界に向けた新たな革新と創造、貢献に挑戦していかなければならない。

私たちは、このような取組を積み重ねながら、将来にわたって持続可能な地域経済と環境共生社会を、皆が勇気を持って様々な夢に挑戦できる社会を、そして弱い立場の人たちやハンディを負った人たち、厳しさに立ちすくみ倒れそうな人たちを、みんなで支え守っていける、豊かさと強さ、そして優しさが同居する協力社会を築いていかなければならない。

（２）将来像実現のための基本理念

現在のような大きな転換期において、“とちぎ”づくりを進めていく際には、しっかりとした基本理念を持って、人と社会、自然をめぐるすべての「あり方」を問い直していかなければならない。様々な転換が進み、価値観も変化しつつある「いま」という時代は、新たな地域創造の可能性を拓く大きな歴史的チャンスでもある。

このため、「いま」、改めて“とちぎ”の原点を再確認し、『活力と美しさに満ちた郷土“とちぎ”』の実現に取り組んでいくことが必要である。

ここで、私たちは、“とちぎ”づくりの基本的方向に向けて、自立と自助、更に互助による幸福の追求である「**分度推譲**」を、郷土づくりの基本理念として掲げ、県民一人ひとりの「知恵と、愛と、勇気」を合わせて、“とちぎ”の魅力と実力を最大限に活かし、この21世紀において、私たちの郷土「とちぎ」をさらに希望と誇りの持てる県として持続的に発展させていく。

そして、この基本理念に基づく郷土づくりを、

分度推譲立県

として推進していくことを宣言する。

(3) “とちぎ”づくりの行動指針

前述したように、これからの“とちぎ”づくりに向けては、第一には「分度」に基づく人と社会の自立・自助の礎を築く、第二には「推譲」に基づく人と社会の幸せをつむぐ互助・協調のネットを織りなす、そして第三には、自立・自助と互助・協調の基盤の上に、さらなる夢と希望に挑戦する躍動的な活力を巻き起こしていくことが不可欠である。

このためにはまず、個人や企業、行政など地域社会の構成員すべてが、新たな地域社会づくりに向けて行動を起こすことが必要である。

この観点から、これからの“とちぎ”づくりの行動指針として、次の三つを掲げる。

① “自”(みずから)をみがく

～いまから明日へ、自立・自助の礎を築くために～

② “絆”(きずな)をつなぐ

～わたしからみんなへ、互助・協調のネットを織りなすために～

③ “風”(かぜ)をおこす

～ここから世界へ、さらなる夢と希望を実現するために～

① “自”(みずから)をみがく

～いまから明日へ、自立・自助の礎を築くために～

豊かな社会の礎を築いていくためには、まず私たち自身や企業、さらには地域が、今ここにあるもの、今起きていることをしっかり見つめ直し、それぞれの持つ個性や能力を最大限に発揮できるよう、私たち自身の新しい設計図を描き、将来に向けて計画的に自らを磨き、各々自立し、責任を持って行動していかなければならない。

また一方で、様々な価値観や生活像の中から、各人がそれぞれの個性や能力と責任に応じて自由に生き方を選択し、心の豊かさや人や自然とのふれあいなど、それぞれの暮らしの中でキラリと光る新たな喜びや生きがいにも目を向けて、心の豊かさや人間的な豊かさを磨いていくことが必要である。

また、「地域が選択される時代」が進展する中では、内外の人々や企業を惹きつけるに足る独自性（魅力、個性）とそれぞれの資源や能力（人、企業、地域など）のレベルアップが重要となる。

“とちぎ”を構成するすべての主体が、自らの持てる資質と能力をいっそう磨き、熟成していく中から、自立した豊かな“とちぎ”を創りだしていく。

② “絆”(きずな)をつなぐ

～わたしからみんなへ、互助・協調のネットを織りなすために～

すべての人々が豊かさや幸福を共有できる社会を築いていくためには、社会を構成するすべての主体が、豊かな心と公共心を持って、他者のため、社会のため、将来の世代のために、自分にできることを自ら考え、行動していかなければならない。

この中でそれぞれの主体が協力・補完しあいながら、人と人、人と社会、人と自然との間に相互の信頼や共生、共助のネットワークを積み重ね、弱きを助け挑戦者に勇気を与えることが必要である。

近年、犯罪の増加や青少年問題の深刻化に見られるように、人々の心や社会のありようが揺らいできている。こうした状況を立て直すには、ともすれば自己中心的な「わたし」のありようを乗り越え、地域「みんな」の暖かなコミュニケーションを通して、互いの思いやりや助け合いの心が息づく家族やコミュニティを取り戻していくことが大切である。

また、身近な「安心」や「信頼」の絆をつなぎ合わせていく中から、地域社会を支え、育むセーフティネットとしての社会システムを確立することが可能になる。さらにこうした取組は、“とちぎ”にとどまらず、全国、そして地球規模での取組へと発展していくものである。

こうした安心と信頼の絆による「ヒューマンセーフティネット」の輪を拡げ、みんなが共に生きることの喜びを分かち合える、おおらかな“とちぎ”を創りだしていく。

③ “風” (かぜ) をおこす

～ここから世界へ、さらなる夢と希望を実現するために～

グローバル化が進む「知恵の時代」にあって、豊かさを創造し、持続していける社会をつくるためには、自立した「個」と「ヒューマンセーフティネット」の基盤の上に、常に新たな革新と創造の風を巻き起こしていかなければならない。

そして、様々な人や主体がそれぞれの夢に勇気を持って挑戦し、この“とちぎ”から、全国に、そして世界に貢献していかなければならない。

そのためには、過剰な横並び意識を改めて、多様な個性を互いに認め合いながら、挑戦しようとする人には誰にでもチャンスがあり、たとえ失敗しても絶望することなくやり直しがきく敗者復活型の社会を築いていくことが必要である。

また、恵み多い環境を将来の世代に引き継いでいくために、私たち自身のライフスタイルを根本から見つめ直し、全国に、そして世界に先駆けた持続可能な発展を実現する社会づくりも私たちが取り組まなければならない大きなチャレンジである。

“とちぎ”の風土に、こうした“風”を起こし、人や企業、行政がみずみずしい発想と姿勢を呼び覚ましていく中から、いっそうダイナミックな革新性、創造性があふれ、さらなる夢と希望の実現に挑戦し、飛躍できる“とちぎ”を創りだしていく。

第二部 県政の取組方向

1 “とちぎ”づくりの戦略テーマ

地域は、人々の暮らしと社会、そして自然の様々な「いとなみ」が絡みあって成り立っている。

“とちぎ”づくりとは、様々な主体や「いとなみ」の総合体としての“とちぎ”の可能性を拓き、新たな活力を生み出すこと、そして、その活力がもたらす喜びや感動、やすらぎやゆとりといった「豊かさ」をかみしめ、分かち合いながら、みんなが共に生き、さらには、そうした「いとなみ」を積み重ねながら、未来の子ども達に、より大きな可能性を約束できるようにしていくことに他ならない。

こうした地域づくりの原点に立ち返って“とちぎ”づくりに取り組むため、“とちぎ”の活力を構成する「いとなみ」を以下の4つの側面からとらえ、「“とちぎ”づくりの戦略テーマ」とする。

そして、この4つの戦略テーマについて、「“とちぎ”づくりの行動指針」の視点から、私たちの取り組むべき方向を定め、具体的な政策を構築する。

- | | |
|--------------|---------------|
| ① 『生きる・まなぶ』 | ～のびやかな「とちぎ人」～ |
| ② 『うみだす・活かす』 | ～明日を拓く産業・行政～ |
| ③ 『楽しむ・ふれあう』 | ～夢ときめく交流社会～ |
| ④ 『つちかう・伝える』 | ～未来にひきつぐ郷土～ |

2 戦略テーマの展開

① 『生きる・まなぶ』 ～のびやかな「とちぎ人」～

「人」は、すべての活動の源泉であり、地域の活力そのものでもある。しかし今、「人」としての生きがいや暮らしの質が問われ、一人ひとりの「心」のあり方をはじめ、人が生き、学びあい、育まれる原点である「家族」のあり方、さらには、人や家族を取り巻く地域社会との結びつきのあり方が問われている。

本県では、地域を単位とするコミュニティが比較的良好に維持されてはいるが、全国との状況と同様、子どもや青少年の「心」のあり方が大きな問題となっており、命に対する尊厳の念がゆらぎ、痛ましい事件も起きている。

これからの“とちぎ”づくりは、「人」と「家族」を起点として、人間尊重の視点から『生きる・まなぶ』ことのあり方を真摯に問い直すことから始まる。“とちぎ”に生まれ、暮らし、集う人々みんなが、のびのびと健康的かつ人間性豊かに、生きがいを持って暮らしていける人づくりや環境づくりを進め、性別や世代の違いを越えてお互いの存在を大切にする、“のびやかな「とちぎ人」”の育成を目指す。

■心おおらか、豊かな人づくり

行動指針 “自（みずから）”をみがく

～いまから明日へ、自立・自助の礎を築くために～

地域のすべての人々が常に自らを高め、生きがいをもって健やかに暮らしていくことが、地域の「豊かさ」の源である。

県民一人ひとりが豊かな心を持って自立し、健康で優れた能力を発揮できるよう、“のびやかな「とちぎ人」”の育成に向け、心、知恵、健康の面において常に自己を高めていけるシステムをつくり、美しく活力にあふれたとちぎづくりを担う、心おおらかで豊かな人づくりを目指していく。

- 心豊かな人を育むシステムづくり（心の教育、青少年健全育成）
- 「学ぶ力」あふれるとちぎ人の育成（学力向上、生涯学習）
- 多様な学びができるシステムづくり（教育・学習コースの多様化）
- 守り育てるみんなの健康（医療対策、健康づくり、保健、スポーツ等） など

■開かれたコミュニティづくり

行動指針 “絆（きずな）”をつなぐ

～わたしからみんなへ、互助・協調のネットを織りなすために～

本県には、家族や地域を単位としたコミュニティが維持され、社会の基礎単位の一つとして大きな役割を果たしてきたが、近年、その活力や機能の低下が懸念されている。また、少子化が進行する中で、安心して子どもを生み育てる環境を整え、地域全体で子どもの健やかな生育を図ることが重要になっている。

“のびやかな「とちぎ人」”の育成に向けて、地域コミュニティの良さを活かしながら、互いの命や心、異なる価値観を尊重し、外部との関わりや相互の助け合いなどを大切にする開かれたコミュニティづくりを目指していく。

- すべての人をやさしく見守る社会づくり（DV・児童虐待対策、外国人との共生）
- 社会の宝、子どもが増えるシステムづくり
- みんなでつくる地域の学校（地域社会と学校の連携、青少年育成） など

■世界にはばたく人づくり

行動指針 “風（かぜ）”をおこす

～ここから世界へ、さらなる夢と希望を実現するために～

経済においても文化においても国際的な交流が進み、世界が一つになっていく中で、世界で活躍できる新しい「とちぎ人」の育成が重要になっている。

これからのグローバル化社会の中で活躍できる“のびやかな「とちぎ人」”の育成に向け、県民一人ひとりが、内面から新しい風をおこし、風を通わせる存在になって

いくことが重要である。我が国や外国の伝統・文化を尊重し、日本人としての誇りとアイデンティティを持って行動できる国際感覚や創造性を培うなど、とちぎから世界にはばたく人づくりを進めていくことを目指していく。

- 小さな地球人づくり（国際感覚教育）
 - 地域に風をおこす人材づくり（創造性・課題解決能力・コミュニケーション能力等を育む教育）
- など

②『うみだす・活かす』 ～明日を拓く産業・行政～

時代の転換期にあって、これからの「知恵の社会」に対応した産業のあり方や、地方分権社会にふさわしい行政のあり方の見直しが強く求められている。

全国的に見ると、本県の産業構造は誘致企業を中心とした製造業に大きく依存しており、今後、新たな成長産業の創出や、高度技術産業への転換、サービス業などの内発型産業の育成などにより、国際競争の激化や景気の変動にも強い、新たな付加価値を『うみだす』、持続可能な地域経済を構築していくことが必要である。

また、これからの行政には、地域社会の様々な人・企業・NPOなど“とちぎ”の主体を結び『活かす』役割を担うことによって、地域づくりへの県民の積極的な参画を促しながら、新たな“とちぎ”づくりを展開することが求められている。

私たちは、地域経済や地域経営のあり方を根底から問い直し、地域にしっかりと根ざす革新性と柔軟性に富む“明日を拓く産業・行政”の構築を目指す。

■とちぎの原動力づくり

行動指針 “自（みづから）”をみがく

～いまから明日へ、自立・自助の礎を築くために～

グローバル化による国際競争の激化や、行政と住民との役割の変化が進む中で、行政も産業も絶えざる革新を求められている。

”明日を拓く産業・行政”の確立に向けて、本県の産業や企業、行政が、自らの力をより一層蓄えるとともに、常に時代を先取りしながら、自ら革新し、いつの時代にも地域の豊かさを支えていくことのできる、とちぎの原動力づくりを目指していく。

- きらりと光る中小企業づくり
 - 地域を支える産業人づくり（職業意識教育）
 - 先端の頭脳づくり（高等教育の充実）
 - 自然の恵みと人をつなぐ農林業（競争力ある農林業）
 - 新時代の効率的な行政システムづくり（財政再建、行政改革、地方分権）
- など

■協働のシステムづくり

【行動指針】 “絆（きずな）”をつなぐ

～わたしからみんなへ、互助・協調のネットを織りなすために～

グローバル化の進展により、国際分業が拡大し、企業間競争が激化する中で、雇用の不安定化や人々の将来への不安も高まってきている。

“明日を拓く産業・行政”に向け、産業や行政は、それぞれの枠にとらわれることなく、様々な相手と連携を図りつつ、国際競争の波に影響されない、地域に根ざした産業や雇用の場をつくり、安心して働くことのできるセーフティネットを構築するなど、協働のシステムづくりを目指していく。

- 労働力減少や新たな雇用のあり方に対応したシステムづくり（雇用流動化、労働力減少への対応）
- 地域に根ざした内発型・協働型ビジネスづくり（コミュニティビジネス育成）
- 住民自らがつくる自治体（県民参加の行政、情報公開、官民の役割分担見直し）
など

■創造の風土づくり

【行動指針】 “風（かぜ）”をおこす

～ここから世界へ、さらなる夢と希望を実現するために～

国際規模での競争が一層激しくなり、産業構造が大きく変化していく中で、地域経済にとって、知恵や創造性により、新しい付加価値を持続的に創りだしていけるシステムづくりが大きな課題となってきている。

“明日を拓く産業・行政”を構築するために、持続的に発展していく内発的な活力を強化し、従来のレベルや枠組みを越え、知恵や創造の気風、そしてチャレンジ精神を育み、競争力を持った産業や地域をつくりだしていく創造の風土づくりを目指す。

- とちぎを支える新時代の産業づくり（新産業創造システム、先端産業誘致）
- “とちぎ”からのチャレンジ精神育成（起業家精神育成）
- 知のフロンティアとちぎを拓く（研究開発促進、科学技術振興）
など

③『楽しむ・ふれあう』 ～夢ときめく交流社会～

産業・行政がもたらす物的、人的な財やサービスは、人や地域が「生きていく」ための必要条件だが、それだけでは人として、地域としての「真の豊かさ」は満たされない。

より大切なことは、人々の暮らしに日々新たな喜びや誇り、生きがいや励みといったみずみずしい「心の豊かさ」が息づき、他からも共感されるような個性と品格を備えた美しい“とちぎ”を創りだしていくことである。

こうした魅力が結晶して、“とちぎ”から、独自の誇り高い「文化」が生まれてくる。

こうした魅力や文化は、人々が『楽しむ・ふれあう』中から醸成されることから、そのための条件整備を“とちぎ”づくりの中に組み入れ、心の豊かさが躍動する“とちぎ”ならではの“夢ときめく交流社会”の創成を目指す。

■にぎわいの舞台づくり

行動指針 “自（みずから）”をみがく

～いまから明日へ、自立・自助の礎を築くために～

地球規模での様々な交流が活発になる一方、地域としての特徴や個性を発揮していくことが重要になってきている。また、意識や行動様式の変化により、心の豊かさや充実感などがより強く求められるようになってきており、真の豊かさを提供・提案できる地域づくりが重要になっている。

“夢ときめく交流社会”の創生のために、観光地としての魅力づくりに加え、地域としての個性や魅力を一層高めることにより、県民が参画し、様々な交流から新しい文化や情報が発信され、地域として自立することのできるような、にぎわいの舞台づくりを目指していく。

○にぎわいとくつろぎの交流点（観光地づくり、中心市街地の活性化）

○驚きと感動のとちぎづくり（とちぎの魅力の発信）

など

■助け合いのパートナーシップづくり

行動指針 “絆（きずな）”をつなぐ

～わたしからみんなへ、互助・協調のネットを織りなすために～

今後、高齢化が急速に進展し、人々の助け合いが社会を支えていくことが重要になる。また、社会参加を通じて生きがいを求めようとする意識も高まっていくことが予想される。また、地域社会の連帯感や人間関係が希薄化する中で、地域の機能低下が指摘されており、地域コミュニティの再構築が必要になっている。

“夢ときめく交流社会”の創生のために、県民一人ひとりが積極的に参加・協力し、男女の垣根、世代間の垣根を越えた助け合いや交流によって、新しい創造や喜び、生きがいづくりや地域への愛着心の深まりなどをもたらす、助け合いのパートナーシップを創ることを目指す。

○男女、年齢を問わず能力を発揮できるパートナーシップ社会づくり（男女共同参画、障害者、高齢者の社会参加）

○誰もが社会貢献できる協力社会づくり（NPO・ボランティア等の活動支援、企業と社会との協力連携）

など

■とちぎの風おこし

【行動指針】 “風（かぜ）”をおこす

～ここから世界へ、さらなる夢と希望を実現するために～

グローバル化により社会経済のあり方、地域のあり方、意識や行動様式が変化し、あらゆる面での競争が激しさを増す中で、地域から新しい躍動や創造力をおこし、その動きを持続的に展開していくことが重要である。

“夢ときめく交流社会”の創生に向け、国際協力によってとちぎに様々な風を呼び込み、通わせながら、とちぎの中から新しい行動や創造、文化が生まれ、育っていくように、とちぎの風おこしを目指していく。

○新しいとちぎ文化の華

○守り活かす伝統文化

○世界の国とのパートナーシップ（国際交流、世界への貢献）

など

④『つちかう・伝える』 ～未来にひきつぐ郷土～

人と社会の「いとなみ」を支える生活空間を安全、魅力的で利便性の高いものとして、さらに私たちの生活すべてを支える環境を持続可能なものとして次世代へ確実に継承していくことは私たちの責務である。

今後の社会資本整備や地域開発にあたっては、環境の制約や投資余力を踏まえ、重点的・効率的で環境にやさしいものに見直していくことが不可欠である。このためには、既存の社会資本や環境は地域みんなの共有財産であるということを改めて再確認し、みんなの手で長持ちさせ、有効活用を図っていくことが重要になってくる。

また、私たちの日常生活や社会活動により危機に陥っている環境を保全していくことに加えて、水や食料、エネルギーなど、私たちの生活に不可欠な資源についても、環境の制約や安全性、安定性という観点を重視し、供給や利活用のあり方を長期的な視点から考えていくことが必要である。

“とちぎ”の魅力と可能性を十分に引き出していきながら、私たちの安全・快適な暮らしを育み、私たちが誇りを持って“未来にひきつぐ郷土”の創出を目指す。

■魅力きらめく空間づくり

【行動指針】 “自（みづから）”をみがく

～いまから明日へ、自立・自助の礎を築くために～

国際間競争や地域間競争が厳しさを増し、暮らしの充実が求められる中で、豊かな地域をつくっていくためには、各地域がそれぞれの個性を活かした魅力を競い、総合力を高めていくことが必要になっている。

“未来にひきつぐ郷土”の創出に向け、とちぎのまちやむらが、それぞれ世界に向けて誇ることでできる美しさや魅力、安心や安全を備え、誰にもやさしい空間となる

ように、魅力きらめく空間づくりを目指す。

- とちぎの魅力をつくるまちづくり、農山村づくり
- 安心で安全な地域づくり（防災対策、治安対策）
- 水・食料・エネルギーの安定供給
- 人口減少・環境時代の社会資本・土地利用

など

■出会いのネットワークづくり

行動指針 「絆（きずな）」をつなぐ

～わたしからみんなへ、互助・協調のネットを織りなすために～

グローバル化の進展の中で、人やもの、情報などの流れをさらに活発にして、地域内外における様々な主体間の交流や協調を促進していくことが不可欠である。

“未来にひきつぐ郷土”の創出に向け、県内や国内はもちろんのこと、世界と結びつく様々な道である交通基盤や情報通信基盤やそれらを活用する環境を充実し、今までの地域の枠にこだわることなく、広く世界と交流し、新しい信頼関係を築いていくネットワークづくりを目指していく。

- 誰でも使いこなせる情報社会づくり（地域情報化）
- とちぎの自立と交流を支える交通基盤整備

など

■みんなを育む環境づくり

行動指針 「風（かぜ）」をおこす

～ここから世界へ、さらなる夢と希望を実現するために～

環境の世紀を迎え、今まで以上に環境への取組を強化していくことが強く求められている。このすばらしい環境を守っていくためには、県民一人ひとりや企業、行政など全ての主体が、その活動のあらゆる局面において環境を意識した行動を展開していくことが必要である。

“未来にひきつぐ郷土”の創出に向け、一人ひとりが環境に配慮したライフスタイルや事業活動に積極的に取り組むことにより、持続的で発展可能な循環型社会を構築し、とちぎのみんなを育む環境づくりを目指す。

- 環境にやさしいライフスタイルづくり（地球環境保全、環境学習）
- 環境首都のシステムづくり（廃棄物対策、環境関連産業の育成）
- とちぎの自然を伝えるシステムづくり（自然環境保全）

など

とちぎ将来構想 体系図

とちぎの将来像

「活力と美しさに満ちた郷土“とちぎ”」

“とちぎ”づくりの
戦略テーマ

『生きる・まなぶ』 ～のびやかな「とちぎ人」～

『うみだす・活かす』 ～明日を拓く産業・行政～

『楽しむ・ふれあう』 ～夢ときめく交流社会～

『つちかう・伝える』 ～未来にひきつぐ郷土～

“自”(みずから)をみ
が く

～いまから明日へ
自立・自助の礎を
築くために～

“絆”(きずな)を
つ な ぐ

～わたしからみんなへ
互助・協調のネットを
織りなすために～

“風”(かぜ)を
お こ す

～ここから世界へ
さらなる夢と希望を
実現するために～

“とちぎ”づくりの 行 動 指 針

将来像実現のための基本理念

「分度推議」

		“とちぎ”づくりの 行 動 指 針		
		“自”をみがく	“絆”をつなぐ	“風”をおこす
“とちぎ”づくりの 戦 略 テ ー マ	のびやかな「とちぎ人」 『生きる・まなぶ』	心おおらか、豊かな人づくり ○心豊かな人を育むシステムづくり ○「学ぶ力」あふれるとちぎ人の育成(学力向上、生涯学習) ○多様な学びができるシステムづくり(教育・学習コースの多様化) ○守り育てるみんなの健康(医療対策、健康づくり、保健、スポーツ等) など	開かれたコミュニティづくり ○すべての人をやさしく見守る社会づくり(DV・児童虐待対策、外国人との共生) ○社会の宝、子どもが増えるシステムづくり ○みんなでつくる地域の学校(地域社会と学校の連携、青少年育成) など	世界にはばたく人づくり ○小さな地球人づくり(国際感覚教育) ○地域に風をおこす人材づくり(創造性・課題解決能力・コミュニケーション能力等を育む教育) など
	明日を拓く産業・行政 『うみだす・活かす』	とちぎの原動力づくり ○きらりと光る中小企業づくり ○地域を支える産業人づくり(職業意識教育) ○先端の頭脳づくり(高等教育の充実) ○自然の恵みと人をつなぐ農林業(競争力ある農林業) ○新時代の効率的な行政システムづくり(財政再建、行政改革、地方分権) など	協働のシステムづくり ○労働力減少や新たな雇用のあり方に対応したシステムづくり(雇用流動化、労働力減少への対応) ○地域に根ざした内発型・協働型ビジネスづくり(コミュニティビジネス育成) ○住民自らがつくる自治体(県民参加の行政、情報公開、官民の役割分担見直し) など	創造の風土づくり ○とちぎを支える新時代の産業づくり(新産業創造システム、先端産業誘致) ○“とちぎ”からのチャレンジ精神育成(起業家精神育成) ○知のフロンティアとちぎを拓く研究開発促進、科学技術振興) など
	夢ときめく交流社会 『楽しむ・ふれあう』	にぎわいの舞台づくり ○にぎわいとくつろぎの交流拠点(観光地づくり、中心市街地の活性化) ○驚きと感動のとちぎづくり(とちぎの魅力の発信) など	助け合いのパートナーシップづくり ○男女、年齢を問わず能力発揮できるパートナーシップ社会づくり(男女共同参画、障害者、高齢者の社会参加) ○誰もが社会貢献できる協力社会づくり(NPO・ボランティア等の活動支援、企業と社会との協力連携) など	とちぎの風おこし ○新しいとちぎ文化の華 ○守り活かす伝統文化 ○世界の国とのパートナーシップ(国際交流、世界への貢献) など
	未来にひきつぐ郷土 『つちかう・伝える』	魅力きらめく空間づくり ○とちぎの魅力をつくるまちづくり、農山村づくり ○安心して安全な地域づくり(防災対策、治安対策) ○水・食料・エネルギーの安定供給 ○人口減少・環境新時代の社会資本・土地利用 など	出合いのネットワークづくり ○誰でも使いこなせる情報社会づくり(地域情報化) ○とちぎの自立と交流を支える交通基盤整備 など	みんなを育む環境づくり ○環境にやさしいライフスタイルづくり(地球環境保全、環境学習) ○環境首都のシステムづくり(廃棄物対策、環境関連産業の育成) ○とちぎの自然を伝えるシステムづくり(自然環境保全) など